

2021. 9. 5 (日) マタイ26:57~63 (前半)

**26:57** 人々はイエスを捕らえると、大祭司カヤパのところに連れて行った。そこには律法学者たち、長老たちが集まっていた。

**26:58** ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の中庭まで行った。そして中に入り、成り行きを見ようと下役たちと一緒に座った。

**26:59** さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするためにイエスに不利な偽証を得ようとした。

**26:60** 多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られなかった。しかし、最後に二人の者が進み出て、

**26:61** こう言った。「この人は、『わたしは神の神殿を壊して、それを三日で建て直すことができる』と言いました。」

**26:62** そこで大祭司が立ち上がり、イエスに言った。「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているのは、どういうことか。」

**26:63a** しかし、イエスは黙っておられた。

#### <説教>

今日の箇所からイエスが裁判を先ずユダヤの最高法院で、次にローマ総督ピラトのもとで受け、死刑の判決を受ける場面に入ります。

また、その合間合間にペテロのこと(58,69-75)、そしてイエスを裏切ったユダのこと(27:3-10)が記されています。

〈人々はイエスを捕らえると、大祭司カヤパのところに連れて行った。そこには律法学者たち、長老たちが集まっていた。〉(26:57)とマタイは先ず記します。

〈人々〉とは〈祭司長たちや民の長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした大勢の群衆〉(47)のことでした。

彼らは〈祭司長たちや民の長老たち〉の命令に従い、イエスを逮捕するという任務を果たして〈大祭司カヤパのところに連れて行〉きました。

〈そこには律法学者たち、長老たちが集まっていた〉、つまりそこで〈最高法院〉(59)ー「サンヘドリン」ーが開かれました。

「サンヘドリン」は〈祭司長たち(サドカイ人)〉〈律法学者たち(パリサイ人)〉〈長老たち(一般人)〉の3グループ合計71人からなるユダヤ人の政治的、宗教的「議会、法廷」でした。

彼らはイエスが連れて来られるのを今か今かと首を長くして待っていたことでしょう。

〈弟子たちはみなイエスを見捨てて逃げてしまった〉(56)なか、イエスはたった一人でサンヘドリンの前に立たされることになりました。

そのとき、〈ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の中庭まで行った。そして中に入り、成り行きを見ようと下役たちと一緒に座った〉(58)のです。

「やっぱり先生を見捨てて逃げたのはまずかった」と思い直したのでしょうか。

彼は〈イエスの後について、大祭司の家の中庭まで行〉き、更に〈中に入り〉もしましたが、しかしイエスからは〈遠く〉離れており、近くに〈一緒に座った〉のはイエスとで

はなく、サンヘドリンの側に立つ〈下役たち〉とでした。

〈成り行き（直訳：「最後、終わり」）を見よう〉ということですから、イエスのことを忘れたわけではなく、気にはなっていたのでしょう。

ペテロはイエスが〈長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によみがえらなければならない〉（16:21）ことを教えられてはいました。

しかし、やはりそんなイエスの「最後」—特にここでは「苦しみを受け、殺され」ということ—は、ペテロにはなお信じられず、受け入れられなかった（受け入れたくなかった）のではないのでしょうか。

そのように、イエスとイエスのみことばを完全に忘れたわけではないが、かと言ってイエスとイエスのみことばを100%信じ切ることもできないでいたのでしょうか。

ペテロの思いと行動はそんな中途半端、どっちつかず、〈冷たくもなく、熱くもない〉（黙示録3:15）態度でした。

一方、〈最高法院全体〉のイエスに対する態度—拒絶と殺意—は決定的、徹底的でした。

〈さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするためにイエスに不利な偽証を得ようとした。〉（59）のです。

〈イエスを死刑にするために〉、形式だけは〈二人の証人または三人の証人の証言によって、死刑に処さなければならない。一人の証言で死刑に処してはならない。〉（申命記17:6）との律法の規定に従っているように見せかけました。

しかし〈多くの偽証人が出て来たが、証拠は得られなかった。〉（60a）のです。

〈しかし、最後に二人の者が進み出て、こう言った。「この人は、『わたしは神の神殿を壊して、それを三日で建て直すことができる』と言いました。〉（60b,61）

やっと〈最後に〉彼らが願ったような証言者がと現れたようです。

しかしそれさえも実は〈この点でも、証言は一致しなかった〉（マルコ14:59）というお粗末なしろものでした。

このように、マタイを始め福音書記者が記しているように、イエスがかけられた裁判は「証言」の点でも全くでたらめで、意地悪く、嘘まみれ、不法不当なものでした。

〈最高法院全体〉の長である大祭司はこれらのイエスに〈不利な証言〉—と自分たちで勝手に考えていただけですが—に対する弁明をイエスから引き出そうとしたようです。

〈そこで大祭司が立ち上がり、イエスに言った。「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているのは、どういうことか。〉（62）

以前も試みたように（マタイ22:15、マルコ12:13、ルカ20:20）、イエスに何か言わせてイエスの「ことばじりをとらえ」ようとしたのでしょうか。

〈しかし、イエスは黙っておられ〉（63a）ました。

〈屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように〉、イエスは〈口を開かな〉（イザヤ53:7）かったのです。

ここでイエスが〈黙っておられた〉のは、〈大祭司〉の問いにどう答えたらいいのか分からなかったからではありません。

また〈大祭司〉の権威に怖じ気づいてうろたえていたからでもありませんし、〈最高法院全体〉の悪巧みの前になすすべ無く降参したからではありません。

「あなたのみこころがなりますように」とゲツセマネの園で祈られたとおりに、イエス

は父なる神の御意思にどこまでも従われ、父のみこころを力強く行っておられたのです。

それは私たちの罪のために十字架で死なれ（からだを裂き、血を流す）るためでした。

神に対して全く不従順な（それが「罪」です）私たちのために、私たちの代わりに完全な従順を神にお捧げになるためでした。

私たちのために私たちの罪をその身に背負い、私たちの代わりに罪の刑罰をお受けになるためでした。

そのためにイエスは十字架の死という本来受ける理由が少しもない「不当な判決」をも父なる神のみこころに従って、すすんで受けようとされたのです。

イエスが受けた裁判のしょっぱなから、私たちは人間の－イエスを拒絶する不信仰者も、また信仰者と見られる者にも残っている－罪深さ、弱さ、無力さを見せつけられるのです。

と同時に、〈黙っておられた〉イエスのうちに、私たち罪ある人間とは正反対の、イエスの罪無き、そして父なる神への全き従順の御姿を見るのです。

それゆえ私たちは、このイエスを私たちの罪からの救い主、人生の主と信じ、仰ぎ、このお方に全く信頼し、自らの罪を認め、悔い改めるのです。

〈冷たくもなく、熱くもない〉態度を認め、悔い改め、主のあわれみを乞い願うのです。